

研究室紹介

埋蔵文化財センター 遺物調査技術研究室

遺物調査技術研究室では、遺跡出土動物遺存体、つまり動物考古学の研究を主にし、さらに環境考古学一般へも研究の対象を広げています。室長の松井章は奈良文化財研究所に勤務して以来、平城調査部勤務であった最初の2年間を除いて、約20年間、埋蔵文化財センターで環境考古学や人骨、動物骨の研修を担当し、動物考古学の研究を続けてきました。この分野の研究の特徴は、可能な限り多くの現生骨格標本を収集することから始まることで、遺跡出土の破片となった動物骨と見比べて、動物の種類や性別、年齢、大きさなどを推定するところにあります。したがって、研究室には3000点を越える原生動物の骨格標本が備えられ、今も新しい標本が作製されています。また当研究室は、京都大学大学院人間・環境学研究科の学生も受け入れ、学生の教育にも励んでいます。以下に研究室の研究メンバーの紹介をします。

宮路淳子は、京都大学大学院で博士号を取得し、現在、奈良文化財研究所客員研究員、京都文教大学非常勤講師として研究に励んでいます。

藤井裕之は、博士課程4年で、これまで弥生時代の木材の樹種選択と製材技術の研究をおこない、現在は対象を広げて、日本原始古代の木材利用史を研究中です。考古学の立場から樹種同定、年輪計測の技術を身につけ、今後が期待されます。

石丸理恵子は、博士課程3年で、広島県帝釈峡遺跡群出土の動物遺存体の研究をおこなっています。

丸山真史は、博士課程1年で、神戸市兵庫津、尼崎市大物、大坂城下町など、中世から近世にかけての遺跡出土の動物遺存体を研究中です。

菊池大樹は研究生で、これまで中国考古学を学び、さらに動物儀礼の研究のため、当研究室で中国で出土する可能性の高いウシ・ウマの同定技術などの基礎を身につけています。

ルブナ・オマルは、シリア出身の国費留学生で、ダマスカス大学卒業、現在、京都大学の研究生として動物考古学の基礎を学んでいます。シリアでは、欧米の調査団を多く受け入れてきましたが、国内に動物考古学の研究者がおらず、自分が最初の動物考古学者になると意気込んでいます。

(遺物調査技術研究室長 松井 章)